

故難操之。於念佛之衆生者。誰不歸哉。因茲。雖知埋壁之誠。還胎彫版之印。於戲玄元聖祖五千言。令尹早著上下之典。本願選擇數十張。門徒將得摺寫之益。思德之志古今惟同者歟。于時辛未之歲。建子之月。聊勅意樹遙傳來葉云爾。

永享版に筆寫せるもの亦此と同一文章なるも、撰者名の記入なき點相異せり、是に依り考ふるに現行本の序文は後世徳川時代何人か其の當時の輕佻浮華の世潮に感染し、大に潤色の筆を弄せしものと見ゆ、忍激師亦此の譏を免れず後の潤色の序文を用ゐて決疑抄の凡例に「平氏序文諸本不同。文有増減。而於義無違。今則依見行印本所載」と記し置かれ、後人をして眞の序文に接するの機會を尠からしめし罪は逃るべからざるものならむ。

以上宗史宗學に暗く、又本邦書史學に無知識なるをも顧みず、烏滸がましくも此の臆斷を爲すの罪は敢て甘受する處なり。大正九年仲秋到彼岸日華頂山下に記す。

## 故の宗教

石井教道

不の一字金陵の美談、具の一字いよ／＼今宗を顯すとは、古來佛教學者が前者は即ち三論否定哲學の奥義を縮表し、後者は即ち天台性惡法門の根本義を詮示する標語として人口に膾炙して居るところである。此れに例するに、もし我が宗教義の深義を一言以て代表せしめ得る標語ありとせば、吾人は須らく「故」の一字吉水の本義なりと言ひたいのである。宗祖曾て門弟に教ゆるに、華嚴には華嚴の一切經あり、天台には天台の一切經あり、乃至諸宗にそれ／＼一切經があると云はれたが、上人の信眼に映じた一切經は終に故の一字に歸納されたのである。故に宗祖に依つて建てられた淨土教の所有る問題は悉く故の一字に依つて解決されるのである。

字典に依つて故の字義を檢べてみると、或は接續詞に、或は形容詞に用ゐられて故人など、熟字され、其の用途甚だ廣いのであるが、今こゝに故といふ意味は、ある事件に對する決定を表明する爲めに用ゐられたのである。例へば、論理學に於て斷案を推演する場合、又、因明に於ける宗に對する理由を提示する際に用ゐられる故と同じ意義の故である。俱舍論等に依ると、吾人の生存して居るこの世界を欲界と名づけるのは、淫欲、食欲、睡眠欲の三欲あるが故に欲界と特稱したといふてあるが、この外、生命欲、名利欲、知識欲等無數の欲がある、於中、あの幼ない子供が、少し物意ろを覺えかけると、

「ナゼ」「ナンデ」と云ふ質問を連發して親を困らすやうに、總ての現象に對して何が故にといふ質問を發し、之を無限に追及して止まない知識欲は、欲界の中に生息する生物・中間の有する特色の隨一である。左ういふ特色が纏て科學、哲學、宗教などの六ヶしい問題を就して居るのである。一度び起つたからには、何うしても最後の「故」にいふ答案を得ぬことには満足のできぬ厄介な生物である。

## 二

社會百般の事象一として吾人の質疑に價ひせぬものはないが、中に於て最も大なるものは、この有限にして且つ不完全な吾人が、然も衷心の欲求である無限・完全圓滿なる理想を何うして體驗することが出来るか、といふことからである。勿論左ういふ無限とか絶對とかいふやうなものが有るか無いかといふ事は一大問題であつて、寧ろカントがいふやうに、吾人の認識では判らぬといふのが適當かも知れぬが、然し彼れも實際問題に衝き當つては、遂に完全・無限の屬性を備へた絶對者を肯定せねばならなかつた如に、又、デカルトが、吾人の如な有限・不完全なものに無限絶對といふ觀念のあるのは、即ちさういふ實在があるからだといふた一面の眞理は、確かに吾人にとつて否定のできぬ事實である。然らば、斯の如く現實の吾人は、有限であり不完全であ

るのも事實なら、又、完全に且つ無限の生を全ふしたいといふ希念も事實であるからには、何うして此の一大矛盾を調和して「故に」といふ一大明答を得る事が可能なのであらうか。言ひ換へるなら、凡夫が何うしたならば佛になれるのかといふ問題は、實に此れ東西兩洋の大宗教家、大哲學者の頭腦を悩ました所であつて、それを一々比較して紹介することは紙幅の許さぬ所であるから、且らく故の宗教を味ふ順序として、我が佛教の上に簡單に一瞥を與ふる事とする。

### 三

佛教と一口にはいふものゝ、其の思想内容については頗る複雑である。然し其の中心問題をなして居るものは、敢て學理の研鑽を目的とするのでもなければ儀禮や形式に浮身をやつす事でもない、たゞそれ我等が奈うして完全に且つ無限の生を享有する事が可能るかといふ質問に對する答案に過ぎぬのである。此の答案の中に於て、一般佛教者の本質的鮮明としては尤も明瞭である。即ち吾人生物には先天的に本有佛性といふ可能性を有して居るからであるといふのである。然しながら、その可能性は、生物若しくは非生物の全體に有るものか、又は部分的に保有して居るに過ぎないものであるかといふ範圍問題に就ては、大小兩乘は勿論、大乘の中に於ても性相兩宗

と分れ、古來より審議考覈されて居る頗る難問題である。その説明には本體論から説き出さねばならぬ面倒等もあるから之を略する事となし、結局、我が淨土教は其の一切衆生に佛性があるといふ性宗に屬するものであるといふ結論を提示して置けば足りる。次に残つて居る問題はその方法論である。即ち何ういふ手段、方法を用いたならば本來具有の可能性を有効に發現さす事ができるかといふ問題である。此の方法論に干しては所謂十三宗五十有餘派の解答が異つて居るわけである。然しながら、大體に於て之を分類することが出来る。此に就ては道綽禪師の聖道門と淨土門との二種分類法が適當であらう。此の分類法は苟も宗乘の第一頁を繙いたものならば誰しも知つて居る事であるから今茲には贅言を省くであらうが、兎に角理想實現の方途を妨ぐる所有る煩惱を斷滅し福と知とを完全に具現すればそこに佛凡一如の體驗が可能るといふ論理と、之を事實に示された釋尊實證の典型とは、所謂聖道門佛教徒の一般に認容した一大潮流であつた。然しながら、深く人間性を稽へてみると、自ら斷惑得果するといふことが寧ろ凡夫性に執つては種々な矛盾を感せしめるのである。彼の理性に勝つたカントでさへ、福と徳との一致は、慾情に覆ふはれてをる現實の吾人には不可能であつて、その期待は來世に囑さなければならぬと匙を投げた

のであつた、善導大師が、罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなしと慨嘆せられ、又、宗祖上人が、當時の學匠明遍僧都に對し、心をしづめ、妄念おこさずして念佛せんとおもはんは、むまれつきの目鼻をとりはなちて念佛せんとおもはんがごとし、等と云はれた深刻なる教訓は、蓋し人間味を眞摯にかみしめたものゝ等しく首肯く所であらねばならぬ。恚ういふ實際問題は、トテも知識のみ組織づけられた形式論理では捌きがつかぬのである。吾人々間として有する一大矛盾苦惱から擺脫し得る唯一の方法はたゞそれ故の宗教あるのみである。

#### 四

三國に通じて佛教史中一大權威者として推舉し得るのは龍樹菩薩である。八宗の祖と崇められるだけ菩薩の思想は多方面に亘つて居るのであるが、先づ凡夫の迷執、外道の邪見、小乗の僻見に對して空の刃を執つて教學の第一步を形成されたと見るべきであらう。然し破壊の爲めの空劍でない以上、そこに尊き建設があらねばならぬ。實に菩薩は法華、華嚴等の經典に依つて積極的理想の世界を肯定せられたのであつた。されど、人間として生れられた龍樹大士、或は又人間を化益せむとして出世せられた菩薩は、難澁な自力聖道の方法は不可能であるとみてとられ、華嚴大經を注釋せん

として企てられた十經毘婆婆論の中に特に易行の一品を設け、諸佛に倚頼して成就し得と説くその中にも殊に彌陀佛を讃仰し、龍樹大士自ら願くば佛に常に我を念じ給へ」と願求し、或は是故に我れ常に念じたてまつる」と希念して、稽首歸命實に二十有三回に及び、別に十二禮を作つて彌陀佛に歸依渴仰せられたのであつた。又、緣起論史上一大功績を貽された天親菩薩の如きも、或は俱舍哲學に、或は唯心哲學にそれ〴〵獨創的學説を發表せられた偉聖であつたが、自他諸共に救はるべき方法に至つては、「世尊よ、我れ一心に盡十方無碍光如來に歸命したてまつる。願くば諸の衆生と俱に安樂國に往生せむ」と希願せられたのである。恁ういふ偉聖の求道に就て記載すべき幾多の例を他に有するが、尤も近くソシテ初めより終りまで凡夫としての人間性に根ざして聖道より淨土への信入を餘儀なくせられた宗祖の實證を簡單に述べて故の宗教の出據を示す事とする。

齡ひ僅かに十有三、温かき慈母の懷裡を出で、叡岳に攀ぢ給ふてより凡そ三十有餘年、あるひは北嶺に實相止觀の月を眺め、あるひは南都の玉殿に唯心緣起の花を探りつゝ、いつも一大疑團の爲めに懊惱たえまなかつた哀れな修道者があつた。素より修者獨自の得脱のみなれば、サノミ苦惱もなかつたであらうが、廣く一般民衆と俱に、

人生に横はる一大矛盾の謎を解き、和氣譎々たる宗教生活に二世安樂の享樂を希念せられた彼れには餘りにそれが空虚で、縁遠ひ、人間離れをした閑事業であつたからである。所謂る修道者とはいふまでもなく宗祖上人である。宗祖曾て聖覺法印に語つて、我が性の分齊何なる大卷の書なりとも三遍これを閲讀せば文義を暗記す、とまで他言し給ひし程の宗祖が、一切經を五回、善導大師の御疏を色讀せらるゝこと八回に及び、初めて吾人凡夫が何うして佛になれるかといふ一大謎を解くべき最後の論理を發見されたのであつた。即ち散善義の中にある「順彼佛願故」の一文である。吾人の救はるべき最後の道は佛の本願に依頼するより何物もないのである。茲に於て積年の疑氷頓に消し、輝々たる靈光は東天紅を染めて塵雲を照破し盡したのであつた。どんなに形式は整ふて居ても、全人としての本性を顧みない空疎な論理は反つて民衆の苦惱を増す種である。寧ろ矛盾と懊惱との増すだけ非自然的であらねばならぬ。然るに順彼佛願故の論證は、長らく形式的論理主義に囚はれて居た人々には非常にツマラヌ、非論理的非自然的であると誤られて居たのであるが、宗祖に至つて初めて旗幟堂々とこれこそ眞實人間性を基調として組みたてられた法爾の道理であることが實證されるやうになつたのである。上人曾て



法爾の道理といふ事あり、ほのほはそらにのぼり水はくんだりさまにながる。菓子の中にすぎ物あり、あまき物あり、これらは法爾の道理也、阿彌陀ほとけの本願は名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば、たゞ一向に念佛だに申せば、佛の來迎は法爾道理にてそなはるべきなり。

と言はれたのは全くその意ろである。鎮西上人が授手印に宗祖を呼稱するに故上人と言はれたのは正しく如上一大論證を發見された上人を記念せむとして特稱せられたものである。記主上人が東宗要卷四に安心の略説起行の略説を明し、中に於て起行の略説を示すとき先師教て云く、善導所釋の文字一つに習ひ入るなり。謂く順彼佛願故の故の字是なり」と説かれ、同師亦十八通卷上に、一代佛經をだんく縮め上げてきて二者深心の一句にありと結論して後ち更に此の如來の四字、大師の十一字言深心者即是深信之心也但だ一字に結歸す。所謂る順彼佛願故の故の字是なり。此れは是れ上人の所得なり。然らば大師は經の二者深心の四字に依つて淨土一宗を釋出し、上人は釋の故の一字を得て念佛の一行を選擇すと云はれたのもみなその意ろである。彼の天台教學の精華を爲す十不二門の如きも、何が故に不二なるやを問ひ詰めるとき、實相なるが故にと答へ、又華嚴の眼睛を爲す十立緣起の如き、何が故に事々無碍するかを追及す

るとき、唯心現の故にと應答する如に、吾宗に於けるあらゆる疑問を解く最後の原理、鍵鑰は順彼佛願故である。

## 五

上來略して八萬四千の經卷が故の一字に縮表さるゝに至つた過程ならびにその輪廓を叙述したのであるが、正しくその故に千鈞の重みを爲さしむる所以の實質を檢べねばならぬ。いふまでもなく故の内容を充實するものは佛の本願である。願とは希望であつて、唯心哲學よりいふならば欲の心所である。然し願の心理をよく解剖して見ると非常に複雑である。即ち第六意識相應の欲を中心として叢起する信、精進、慚、愧、無貪、無瞋、無痴、輕安、不放逸、行捨、不害の善心の十一と、欲、勝解、念、定、慧の五別境と、觸、作意、受、想、思の五遍行と、加ふるに第七識、第八識總じて二十四心一聚の心理現象に名づくるのである。此の主觀心理の對象としてのこの客觀性は、即ち自己並びに社會である。要するに不完全なる現實を完全無限に活動させたいといふ希望である。但し其の希望は實行を俱ふものに限りにて欲の心所と名づくるのである。而して此の希念の性質上一般的なものと特殊的なものとあつて、古來前者を總願と云ひ、後者を別願と稱して居る。例へば四弘誓願の如きは前者であつて、悲花經に説く釋迦の五百大願とか、藥師

本願經の十二願等は別願である。今此の故の内容を爲すものはいふまでもなく彌陀佛が初地の位に在つて建てられた別願であつて、中に於て特に吾人が眞心をこめて稱名し、念々に理想をかみしめつゝ、人生々活を續け行く最後には必ず理想の全表現が可能なる。もしその體驗の可能ぬ空虚なものであつたならば我は覺者とはならぬといふ固い誓ひの第十八願が主體である。勿論廣く經典を披閱してみると、本願佛として紹介されてある佛の少くないことは、前掲の外、阿闍經には阿闍の本願あり、勝鬘經には三大願ある等その例である。然しながら、慈悲の主、本願の王として特に紹介されてあるのは全く彌陀一佛である。大原問答の中に「諸佛中彌陀爲本、被佛是淨佛國土主、諸佛慈悲之體」といふてあるのは過言ではない。龍樹菩薩希願の上から見ても明かであつて、彼の妙樂大師が、諸經所讚多在彌陀と云はれたのに徴しても明了である。況や彌陀經に、現在西方去此十萬億と云ひ、現在說法佛といふに至つては、彌勒や迦葉佛等の現實より縁遠い過去未來の佛とは比較にならぬのである。古來多くの聖人が最後に彌陀佛に歸依せられたのも敢て偶然の事がらでないことが判る。斯様に凡夫救済の希望を興して已に之を成就し給へる彌陀佛の本願、而してその本願法爾の論證に依つて打ち立てられた故の宗教こそ、淨土教開立の基本であるのみならず、人間とし

ての一大懊惱みを救ふ唯一の教へであり、最後の論證である。

インターネット公開許諾がない文章には墨消し処理を施しています。